

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと 風

第176号（2021年1月）



白井啓治

（十五）言葉には風景があり物語がある

（2009年1月22日）

『幸せの心が言葉の絵になって君を抱く』

つくば美術館で知人の参加する書道展があり、出かけてきた。型にはまらず自由な書の表現を、と言う内容の書が多く展示されており、楽しむことが出来た。

劇団の研究生とは別に、何人かの人に朗読を教えているのであるが、研究生にも趣味の人にも型にはまった朗読の読み方というものを教えたことがない。そして、彼らにはこのように話している。朗読というのは演劇なんだから、自分を劇（はげ）しく表現しましょう。文章に書かれた言葉の一つ一つには風景があつて、物語があります。言葉に秘められて在る風景や物語というのは、作品全体として作家の表現したかった風景や物語とは別に読み手の感性に基づいた、其々に異なる想いのある風景や物語があります。だから、標準のアクセントだとか何だとかを気にする前に、自分の感じている風景や物語を確りとらえましょう、と言っ

ている。朗読に限ったことではなく、すべての表現に共通することであるが、大事なのはどれだけ自分自身の思いを劇しくそこに出せるかということである。一般の人に朗読を教えてみて、多くの人がいかに勝手な固定観念を持っていることかと驚きを感じる。



（絵：兼平智恵子）

書道展を見て、自由律の書の表現に挑戦しながら其々が勝手な解釈に邪魔されて、言葉にある風景と物語を掴めないで右往左往している筆のためらいが、大層微笑ましく、楽しい思いにさせられた。一言の言葉には、風景と物語がある。言葉とは単なる説明の道具ではなく、表現の為の手段である。だから私は、言葉に接したら先ずその言

ふるさと風の会会員募集中！

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額2,000円。（会報印刷等の諸経費）

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

打田 昇三 0299-22-4400 兼平智恵子 0299-26-7178

伊東 弓子 0299-26-1659 木村 進 080-3381-0297

編集事務局 〒315-0014 石岡市国府 4-3-32 （木村）

HP <http://www.furusato-kaze.com/>

葉から風景を思い描き、物語を聴きとることに集中したいものである。妙に屁理屈っぽい話になってしまったが、言葉とはそういうものだと思う。余談になるが、朗読教室などに通った人の話を聞く時、大方の人が標準語というのは正しい日本語と錯覚を起こしている。そして訛りは正しい日本語ではないと思っている。茨城弁も栃木弁も関西弁もみんな正しい日本語である。脚本・演出家のへそ曲がりな言い方になるが、標準語は間違っていないが、正しくない日本語と言っても良いだろう。

（本稿は故白井啓治氏が常陽新聞に2008年7月より約1年間に亘り掲載されたエッセイを載せています。）

新年おめでとぅいびいます。 木村 進

昨年初め頃より、新型コロナウイルスの脅威の前に世界中が右往左往してきましたが、今年もまだこの渦から脱出する事ができないでおります。また今年は1年延期したオリンピックの年といわれていますが、まだまだ越えなければいけないハードルがたくさんあり開催も不透明になって来ました。ただこんな年ではありますが、今年も本会の会員及び読者の皆様が健やかに暮らしていけることを切に願っております。

さて、一昨年の6月末本会の主査であった脚本家の白井啓治氏が亡くなられ、12月には県獣医師であった菅原茂美氏も後を追われてしまいました。重鎮二人を失い、残る会員で力を合わせ、本会報もここまで継続してこれたことを大変嬉しく思います。「ふるさと風の会」会報も本年5月で満15年を迎えます。毎月全会員が原稿を欠かさず続けてくる事が出来たのは自慢してよい事だと思っております。そして本年は節目の十五年を経過して更に継続できる事を願っています。白井先生がお亡くなりになり、現在会報の最初に白井先生が以前、常陽新聞に掲載していた31編のエッセイから記事を転載しています。このエッセイの巻頭に氏が書かれた文を以下紹介しておきます。

はじめに 白井 啓治

これという目的もなく歩いていけると、風がやってきていろいろなことを囁き、今日の私を教えてくれる。

嬉しいとき、哀しいとき、寂しいとき、切ないとき、

き、折々の心模様を見抜いて囁いてくれる。風の自由自在の囁きを聞いていると、どんな自分でも納得することができる。

時には意地悪な囁きもするが、それはそれで納得させられる。だから毎日、風に尋ねて散歩する。風の納得させられたら小さく自分に呟いて聞かせよう。

―風によつて 時を漂い言葉に遊ぶ―

朗読舞「ふるさとの風に吹かれて」の台本の頭の部分に書いた文面であるが、石岡に越してきた当初は、パグ犬の「葉津」をつれて出し山と呼ばれる周辺の雑木林をよく散歩した。そして、

- ・ 風によつて時を漂い言葉に遊ぶ
- ・ 雑木林を抜けると春がいた 菜の花の風を黄色く塗った

- ・ 春の一本道 桃色吐息
- ・ 小声に歌ったら笹の葉の拍手をしてくれた
- ・ 等々の一行の文を呟いた。

一行文は、俳句や詩などよりもっと気軽に、時々が発見や思いを一言の言葉に落とす一行詩と位置付けることが出来る。時々的心模様を一言の言葉に落としてみるによつて、自分を客観的に見つめる事が出来るようになる。

一言の言葉に落としてみるによつて高ぶった、激した心が平穏を取り戻し、自分を間違いない方向に導いてくれる。

昨年(2008年)の春であった。常陽新聞の編集者から、もともととはっきりしない物言い電話があった。月三回、エッセイを書いてもらえないだろうか、というものであった。口ごもったも

どもぞとした言い方は、編集者の癖と同時に、原稿料が払えないことのせいであった。作家になって初めて只働きをさせられた。

何を書いても構いません、というのと兼平さんの絵をのせてもらつて構わないという事で、ことば座や風の会の宣伝になるか、と引き受けたのではあったが、月三回とはいえ、決められた日に出稿しなければならぬのは、足を引っ張られるほどではないが、大層億劫になるものであった。

糞つたれが、と悪態をつきながら締切日に間に合わせるのであったが、一行文に一言の言葉を落とすと、苛立った気分が落ち着いてくるのである。人の心というのは面白いものである。糞つたれ、と思いつながら「糞つたれ」と言葉に落としてしまふと、糞つたれな気分が落ち着いてくるものである。おかげでこの文も過激なエッセイにならずに済んだ。このことは良かったと感謝をせねばならない。

掲載紙面では、兼平さんのせつかくの絵がモノクロであった。それで描かれたもと絵の紹介を兼ねて、本冊子に編集をし直してみた。

兼平さんの絵は、ことば座「常世の国の恋物語百」の定期公演の舞台背景画として描かれた「常世の国の五百層」である。その中から、本エッセイの基本テーマである「恋の心(物語)の降る里」に合わせて選択させてもらったものである。

以前より、物語の生まれない里は滅びると言ってきたが、最終回のエッセイに述べたが、「ふるさと」というのは、心(物語)の降る里のことを言うのだと思う。

小さいけれど、心(物語)の降る里への応援歌と

なればと念じて書いた、甘く小さなサーティーワ
ン。

「君がいて僕がいて恋が生まれて愛が育まれてふ
る里の風」

小さくてもいい、沢山の物語の降る里になつてほ
しいと願うものである。

2009年6月26日 白井啓治



年の初めに

兼平智恵子

謹んで新年のお慶びを申し上げます

う まく乗り越えましょう

し ん型コロナウイルス

昨年は未曾有のウィルス、新型コロナウィルス
に翻弄された一年でございました。そして今尚、
世界を猛威で包み込み感染拡大がすすんでいます。
若年層からの感染拡大から始まり、職場内、家
庭内、そして高齢者へと感染拡大が続いています。
果たしてウィズコロナと言う新しい生活様式の中、
3密（密集・密接・密閉）を避け、3守（マスク・手

洗・うがい）を行っているでしょうか……

いや、ちよつと位大丈夫！皆で飲みにいこう！
若いから大丈夫軽症ですむから！ マスクなんか
しないよ！ストレスでたまらない！等々おおいに
自分の身を振り返ってみたい。

○油断大敵コロナ侵入

細心の注意を払っても襲われてしまう、命がけ
で命を守って下さっている医療や介護従事者の皆
様、身を案じながら現場で励んでいるエッセンシ
ヤルワーカーの皆様、懸命に注意を發してくれて
います閣僚、各県知事、各市長の皆様、報道機関
の皆様、経済回復のために一線で必死に活躍なさ
っている皆様に心を寄せご苦労に心から感謝を申
し上げます。

感染拡大と共にとても気になる情報です。新型
コロナの後遺症について注意を喚起なされている
脳神経外科専門の先生によりますと

倦怠感、呼吸困難、認知症のような記憶障害、
脱毛などの障害は年代や重症度に関係なく確認さ
れている。新型コロナの症状では血管の炎症がみ
られており、私見として「炎症による血流障害が、
心臓、毛髪など、どこに影響を与えるかで、後遺
症の症状が異なるとみられる」と述べられている。

県内でも、患者の四十代女性が血流障害による
脳梗塞を起こして半身まひになったケースがあつ
たという。 また先生は「若者は軽症でも、若い
分だけ後遺症に苦しむ期間は長くなる。若者が認
知症のような記憶障害などを背負つては日本の未
来にも関わる」とさらなる警戒を呼び掛けられて
いた。

是非是非若い皆さんに読んでいただきたい呼び
掛けでした。新しい生活様式を確りと心得て、自
分のため、愛する人のために、そして自分の健康
は家族みんなのために、今の世では日本のため、
世界のために、老いも若きも新型コロナに立ち向
かっていきたい。

江戸幕府二六〇年の礎を築いた徳川家康のいく
つかの名言の中に「不自由を常と思えば不足なし」
があります。

これからはウィズコロナ、新しい生活様式が当た
り前、何も不満を感じることはないと言う生活に
なりますように望みます。

尚、今年の丑年の運勢は広い視野を持つ事で好
調な運勢をさらに勢いづかせる変革の一年になり
そうと言われているそうです！

牛は古くから、酪農や農業で人間を助けてくれた
大切な動物でした。大変な農作業を最後まで手伝
つてくれる働きぶりから、丑年は「我慢（耐える）」
「これから発展する前触れ（芽が出る）」というよ
うな年になるとも言われているそうです。

一陽来復、必ず温かい春はやってきます。
そして必ずや今年の東京オリンピック・パラリン
ピックが盛大に行われます事信じております。

地域に眠る埋もれた歴史（67）

木村 進

〔4 大増・太田・恋瀬地区〕（4）

4.4 善光寺万灯祭

太田宇堂山948

昔は万燈祭がおこなわれていたそうです。
その時の盆歌があります。

♪ 苗代(なしろ)の水の口 お池の松は姫の松

繰り返しながら寺の周囲を回ったというこの歌の意味はなんでしょう？

万燈祭の写真は境内広場の建物(太田田園都市センター)の中に飾ってあります。この祭りの詳細は後で述べます。善光寺といえば長野にある「牛に引かれて善光寺参り」で知られる善光寺を当然思い浮かべます。百濟から伝わった(約1400年前)日本最古の仏像といわれる阿弥陀如来像(三尊)を本尊(秘仏)としています。

話によると、この仏像は蘇我氏と物部氏の争いで、物部氏によって大阪難波に打ち捨てられていたものを、信濃から都に来ていた本田善光という人物が西暦659年に拾い上げられ現在の長野県飯田市に祀られるようになったとされています。

今では6年に1度の開帳が行われています。

この善光寺の阿弥陀如来三尊(立像)を模した善光寺式阿弥陀仏を信仰する動きが全国に広がったのは、鎌倉時代から室町時代にかけてでした。

このため、仏像を納め奉るために全国に善光寺という名の寺もたくさんできました。

ここ太田の善光寺は、つくば市から土浦市などを支配していた小田氏(八田氏、宇都宮氏からの派生)11代当主の小田成治の母堂が、小田家の菩提寺である山之莊村小野(現在の小町の里のあるあたり?)の「新善光寺」を深く信仰して、出家して雪主比丘尼となったため、成治は、この母親のために、新治郡井白郷館莊太田月光山麓(今の寺よりも山よりのもつと高いところ?)を安隱の地と選び、文亀元年(1501)「月光山無量寿院善光寺」を建立し、小野にあった新善光寺を此処に移

したといえます。

その後、元禄14年(1701)11月に、寺を現在地の堂山に移したとされています。しかし、地元の人に話を聞いてみたのですが、明治はじめまでは、門をくぐった左手にある立派な「太田田園都市センター」(公民館)の場所に寺があり住職もいたといえます。すると、いま階段を上った上にある崩れかけた立派な堂宇はなんなのでしょうか? これは「お宮」だということです。小田氏が守ってきたお堂といわれています。小田氏がかつと善光寺と新善光寺が両方あったことになるのかもしれない。



お堂の裏手の五輪塔
(小田氏歴代の墓といわれる)

現地を見ると上のお堂の裏手にたくさん五輪塔が並んでいます。

今もその子孫という方(小田姓ではない)がこの場所を管理しているそうです。

小田成治の母がこの地で尼として暮らしたと言われていますが、この成治後の小田氏の家系を見るとおかしいことになっています。成治の二人の

息子(治孝、顕家)が跡目を争っているのですが、12代は長男の治孝なのですが、すぐに跡を継いだのは足利将軍の一族の足利政知(まさとも)の子供(政治(まさはる))を成治の養子に迎えています。

戦国時代に名前を出てくる小田氏治(うじはる)はこの小田(足利)政治の子供です。

この氏治の代で最後は小田城も土浦城も奪われ、佐竹氏に滅ぼされてしまいました。(1590年)この時に氏族が絶えたのではなく、一部は八田氏に戻り豊臣秀吉に仕え、また一部は越前に行ったともいわれています。

どうやら小田氏の中で内紛が起こった時に、氏族の一部がこの地に逃げてきたと考える方がつじつまは合います。そして、代々の墓もここに移したのだと思います。

さあ、この寺がますますわからなくなりましたが、小田氏(足利政治の来る前の小田氏11代)の墓なのでしょうか?

寺を神宮寺のような性格にするために神社を作ったのかもしれませんが。この梵語の書かれた石の年号は寛政九年(1797)となっており、この寺(お宮?)の建設もその頃ではないかと想像しています。

この寺も調べていくと本当はもつと重要な場所だったのかもしれないと考えるようになりました。

この善光寺境内では旧暦6月14日(現在の7月下旬)の晩に「太田の万灯祭」が盛大に行われていたといえます。しかし、いつの間にか祭りは行われなくなり、現在では善光寺楼門入ったところにある「太田地区田園都市センター」で善光寺御本尊の阿弥陀像を祀って、地元の世話役による祈願

祭のみが行われているといえます。

この万灯祭について地元の方にお聞きしたことに
よると、昔は祭りの3日前に楼門の前に旗を掲げ、
善光寺の池の掃除をし、竹を伐り出し、万灯の準備
をしたそうです。しかし東京オリンピック前後の
高度成長時代になって、平日では人が集まらな
くなり、この準備は祭りの1週間前の日曜日に実
施されるようになりました。まず境内にある池の
掃除をし、そして万灯作りを行います。この万灯
がどのような形をしていたかがわからなかったの
ですが、つい先日、境内に建てられている田園都
市センターの集会所にミニチュアサイズの模型と
昔作った時の写真が飾られていたのを偶然見るこ
とができました。



万灯の模型

これによると、真ん中に高い梯子を立て、その両
側に太い竹の棒（約6m）に縄を螺旋状に巻きつ
けたものを6本を準備し、それをはしごの上の方
に放射状に櫓を組むように縄で固定します。そし
て、真ん中のはしごの先端に「太田」と書かれた
提灯や御幣などを取り付け、また太い縄を数本結
びつけて、両側から人が引っ張れるようにして完

成です。

さて、祭り当日は、この万灯のはしごに2人が登
り、他の参加者が竹の棒と太縄（綱）を持って持
ち上げ、善光寺を右回りに3回回りながら次の歌
を歌ったそうです。

♪ 潮来出島のよれ真菰（まこも）

殿に刈らせて我捧ぐ

ささぎ揃いて船に積む

船は何船宝船

船は出て行く森の影

此処は何処だよ船頭さん

此処は神崎森の下

森の下には狐棲む

棲むや白狐

我も二三度騙された（出典・八郷町史）

さて、地元の年配の方に伺いましたが、この潮来
節の歌はあまり記憶にないようでした。昔は、最
初の準備で竹を運ぶ時や、夜に一晚中歌い踊った
歌は、次のようなものだったという話をお聞きし
ました。

苗代（なしろ）の水の口 お池の松は姫の松

この短い歌を一晚中歌ったといえます。この「苗
代」は田んぼの水の取り入れ口のことです。豊作を
願って歌われ始めたものだと思います。しかし
「姫の松」とはどういうことでしょうか。地元の
方のお話では女性を大切にしているこのような歌にな
ったのだらうということでした。

この善光寺は小田氏に縁のある所と言われ、上のお
堂の裏手には小田家のものと言われる五輪塔が
たくさん並んでいます。善光寺という寺は明治半

ば過ぎまで今の楼門をくぐった左手にある「田園
都市センター」の場所にあったが、無住となり、
御本尊と言われる高さが1寸8分（約6cm）の小
さな金の阿弥陀如来像を、今の階段を上った先に
ある大きなお堂に移したといえます。しかし、こ
こも維持ができなくなり、現在は、近くの小田家
の子孫と言われる家の土蔵に木箱に入れられ保管
されています。

ここも小田氏の内紛が起こり、この地に小田のお
姫様などが逃げてきたのではないかという話もあ
ったようです。歌に出てくる「姫の松」とも関係
があると考えてみるのも楽しくなります。

さて、最初に書いたもう一つの長い歌はいわゆる
「潮来節」で江戸時代に全国に広まったものの一
つだろうと推測されます。でもこの歌詞もじつこ
り読むと大変興味が湧きます。

「潮来出島」というと、長唄や日本舞踊などで有
名な「藤娘」の中に取り入れられ、全国に知られ
るようになった歌（潮来出島）があります。

潮来出島の真菰の中に

菖蒲（あやめ）咲くとはしおらしい

サアサよいやサア

この歌が最初に見られたのは1822年の「浮れ
草」だそうですので、潮来には当時いろいろな商
人たちがやってきていて花街としてもたいそう賑
わったのだと思います。

さて、この祭りの時に歌われたという潮来節は似
たものを探してみると、浮れ草よりも更に50年
ほど前の、1772年に収録された歌謡集「山家
鳥虫歌」に次の歌が載っています。

潮来出島のすな真菰（まこも）

殿に刈らせて我ささぐ

さつさおせおせ

1772年はまだ江戸の中期で田沼意次の時代。

この時代の歌が残っていたのでしょうか。

また、

此処は何処だよ船頭さん

此処は神崎森の下

に出てくる神崎（こうざき）は香取神宮のある千葉県香取郡にある神崎神社のことです。下総国から常陸国へ入る入口に建てられた神社です。ナン

ジャモンジャの木があることで知られています。

ここにも数ヶ月前に行ってきましたが、今でも鬱

蒼とした森があり利根川がすぐ横を流れておりま

した。江戸時代には霞ヶ浦や銚子からの水運では

たくさん船が行き来した場所が目印になった森

だったのでしょうか。この神社にも次のような潮来

節（船頭唄）が残されています。

ここは神崎森の下

梶をよくとれ船頭どのよ

主の心と神崎の森

ナンジャモンジャで気が知れぬ

この万灯祭の歌も残っていれば、この地から材木

を切り出し、米俵を恋瀬川上流の船着場まで運び、

そこから霞ヶ浦を通って江戸へ物資が運ばれてい

たのではないかと推測するきっかけにもなるはず

なのです。生活スタイルが変わり、昔の祭りを継

続することはかなわなくなるかもしれませんが、

このような歌も残していくことも大変意義がある

ことだと思えます。この潮来節がその後いろいろ

発展し、神戸（こうど）節になり、石岡も大いに

関係のある「都々逸」に発展したのです。

このようなお寺がなくなり、この地の歴史が消え

ていかなないように、市でも保存方法などを検討し

ていただきたいと切に願っています。

昔行われていた時の写真が、この田園都市センタ

ーの部屋に飾られていました。

大きさはこの写真でわかりますね。大きなはしご

を真ん中にして6 mくらいの長さの太い竹の棒

を数本と、縄を取り付けます。

はしごに2人が乗り、それを皆で持ち上げて、寺

の周りを歌いながら3周するのだそうです。セン

ター建屋の中には祭をした当時の写真も残されて

いましたがここでは記載は省略させていただきます。



写真の真ん中が「善光寺楼門」です。奥に見える

山並みは吾国山（528m）から難台山（553m）、愛宕

山（305m）へ続く山並みです。

この善光寺楼門の南側には田園が広がります。

この少し先の方には昔恋瀬川に荷を積み出す舢が

あったようです。

西側の地区には大きな家も目立ちます。

また、この少し南西側に「大足（おおだら）」とい

う地名が残されています。

水戸の方にも同じ名前の場所が有り、ダイダラボ

ツチ伝説なども残されていますが、製鉄と関係が

あるような話も聞きますので、この地も大昔に海

の水が入ってきていて砂鉄でも取れたのかもしれ

ません。

ところで小田氏が善光寺信仰をしていたのでした

ら、善光寺仏と言われる阿弥陀如来三尊が祀られ

ているのかと思いました。

しかし、ここに祀られているのは1寸八分くらい

の小さな金の阿弥陀如来像だそうです。

三体ではなく1体です。

普段は個人宅（小田氏の子孫といわれる）の土蔵

に保管されていて、この旧暦6月14日にこの田

園都市センターにお寺さんと呼んで役員の方々が

集まって、開帳されると聞きました。昔はこれも

眩しくて目が潰れるなどと木箱を開けなかったそ

うです。金の如来様も見てみたいですね。

帰る途中で、石岡府中酒造さんの「渡舟」の米の

栽培地がありました。

（付録）道祖神峠

この善光寺楼門のある通りを進むと道祖神峠を

越えて笠間に出る。板敷峠が標高90 m程度なのに

対し、この道祖神峠は標高が310 mあり、吾国山（標

高518 m）と難台山（標高553 m）とを結ぶ尾根の

鞍部でかなり標高が高い。

そのため、ここを越えることはめつたになく、笠間に行くときに久しぶりに通ってみた。善光寺のところから山道に入り、道は良いがぐんぐん高度を上げていく。峠に到着して峠は尾根の縦走路と交わっていた。石岡市と笠間市の市境になる。



峠より難台山へ続く道

難台山は南北朝時代に城があり争いのあった場所。また天狗の伝説もある。

名前の由来となった道祖神を探した。草陰に隠れていたが、峠の頂上にはしっかりと立っていました。

我が労音史 (25)

木下明男

20代に参加した労音運動は、1970年からは労音の中心活動家として参加しています。そして、労音改革の責任者の一翼を担う様になり、実践の中から学んだ内容を記述していきます。

1996年の社会情勢と音楽状況

台湾初の総統直接選挙で、台湾出身の李登輝国民党総裁が当選。ペルーの日本大使公邸で600

人が拘束され、その内72人が4ヶ月に渡り人質となり、その間日本政府の無策さが問題となった。アメリカのジョウジア州アトランタでオリンピック開催。(金メダルは3個)柔道・恵本裕子・中村兼三・野村忠宏)将棋の羽生善治が史上初のタイトル七冠独占。住宅金融専門会社(住専)7社が2兆1900億円の不良債務で経営破綻し、政府は6850億円の住専処理法を成立。(後に住宅金融債権処理機構)中坊公平社長が1兆4千億円回収)消費税が3%から5%に引き上げられた。この年、病源性大腸菌O157の患者が2000人を超す。「薬害エイズ事件」で安部(前帝京大副学長)が逮捕、その後ミドリ十字の歴代社長や厚生省課長が逮捕された。

東京オペラシティが完成。神奈川県芸術フェスティバルで團伊玖磨「ひかりごけ」再演。長野県松本で開催のサイトウ記念フェスティバルで「レイレジアスの乳房」・「武満徹メモリアル・コンサート」公演。この年逝去された著名な音楽家・文人・武満徹(作曲家)井上頼豊(チェロ)木村好夫(ギター)芳志戸幹雄(ギター)石桁真礼生(作曲家)安川加寿子(ピアノ)村田武雄(音楽評論家)柴田南雄(音楽評論家)岡本太郎(芸術家)三橋美智也(歌手)渥美清(俳優)沢村貞子(俳優)横山やすし(漫才)司馬遼太郎(作家)遠藤周作(作家)宇野千代(作家)藤子不二雄(漫画家)石垣綾子(社会運動家)チェリビダッケ(指揮者)クーベリック(指揮者)

1996年の労音の動き

大久保会館で開催された第44回総会は、前年に続き運営委員会での討議で、例会を成功させるた

めの体制強化・機関紙の充実・企画の充実・企画研究・各種イベントの充実・健全財政・演奏サークル活動・民主団体との協力・共同企画・各地域センターの活用等の目標が確認され運動を進めた。東京労音全体の例会数は156回、例会参加者数は2523名で、例会回数は22回増えているが2500名の例会参加者数が減少している。アートコートの小例会や他事務所との共催例会が増えているので一回当たり会員数は減っている。出演料や製作費の値上がり、宣伝費や運営費の増加など経費増が大きい。

ここ数年、「会員1万名」「サークル数1千」「委員3百名」の目標を掲げてきた。会員1万名は、例会参加者数が月平均1万名、その数を達成するためには1千のサークルと3百名の担い手が必要という考えです。93年・94年・95と大型ポピュラー例会増加に伴い、例会参加者数も年間10万名を超すようになり、登録上のサークルも1千に迫ったが委員数は1百名で止まっている。これらは、労音運動の高揚で増えたのではなく、企画制作・営業活動の広がりが増えたのが現状。この状況を改善するためにも、現在の実態を再度見直し、委員・運営委員・事務局員が互いに知恵を出し合うことが確認された。

会員制度の見直しについては、年初めに臨時総会を持ち、東部・府中・東葛・城北のブロック地域に続き、都心部地域にも「固定会員制度」を取り入れる。東京文化館小ホール・五反田ゆうぽーと・北とびあいの3会場を特定し、2ヶ月に一回(年間6回)を原則として、入会から1年間「継続鑑賞」をする制度で、翌年4月から会員を募集する。

この制度の導入は、会員組織率を高め例会予算を

明確にし、会員の希望を例会に反映させる、という意図がある。会員制度を確実なものにしていくために、この制度の意義を浸透させ、個人個人がこの制度に確信を持ち成果を上げることが大切だ。

今年度的大型クラシック企画は厳しい取り組みになった。4月の「キネマファンタジー」5月の「シチリア交響楽団」6月の「ブラハ放送管弦楽団」は、何れも1000名に届かず、毎年取り組んでいる、「第九」の合唱例会もあわせ、大きな赤字を生み出した。ここ数年の大型クラシック企画を鑑み、今年度後半より東京文化会館大ホール定期使用(月一回)の権利を取り下げた。

オリジナル企画の「菅原洋一とアルゼンチンタンゴ」4回、「沖縄歌舞団」2回を全国共同企画として取り組み、大きな評価を得たが、組織的には厳しい状況だった。会員要求の高いアーチストの殆どが、イベント主催の「〇〇コンサートツアー」とのタイトルで制作された全国ツアーを買って取って、例会に入れるという状況が続いている。鑑賞団体として、労音らしい企画を作るためには、全国の各労音と共同して、独自性を追求する必要がある。東京労音は首都の労音として、全国の主要な音楽事務所が存在する利便性から、要求の高い企画を作り出す役割が求められている。今年度は、「小原孝」3回「西城秀樹」3回「布施明」4回「由紀さおり・安田祥子」7回を成功させた。

「大久保会館」・「十条会館」二つの開館を中心に、東部センター・お茶の水センター・南部センター・府中センター・東葛センター・ギター文化館を拠点として活動を進めている。各会館・セン

ターとも貸出し収入目標もほぼ達成し、順調な活動を進めている。大久保会館は、地下のマスアートルコートの企画21公演、十条会館は、地元とともに「十条まつり」を開催し238名が集う。東部センターは、21回のセンター例会を企画し、「日の出寄席」音楽の楽しみが定着している。その他、ギターサークル・太鼓教室・合唱団等の活動拠点としても位置付けている。お茶の水センターは、使用度は昨年比13%に上がっている。南部センターは、民族音楽教室の開校を予定している。ギター文化館は、開館5年目でギター愛好者を中心にして200名の会員、コンサート(月1回)も毎回、100~200名を集めている。新たな労音建設も視野に入れている。東京労音は、15年間、関東の幹事労音として活動を進めてきた。最近の関東労音の活動は、新たに誕生した「所沢労音」「虹の音楽鑑賞会」「狭山労音」、更に「秩父音鑑」が復活して、全国でも先進ブロックとなっている。そこで、東京は関東労音から前進的に独立し、単独ブロックとして進むことになった。

第41回全国会議は東京で、37団体93名が参加し開催される。虹の音楽鑑賞会の誕生と鹿児島労音の復活が報告。長崎労音・山口音鑑の解散も併せて報告された。全国、北海道8・東北7・関東9・甲信越4・東海6・関西8・山陽道10・四国4・九州5団体61団体になる。(つづく)



時の流れを巡って

伊東弓子

歳の所為か、自分の先祖を子供達に知らせておきたいという気持ちを大分前から持っていた。小田城発掘・整備の展示会へ一族で行こうかと計画したこともあったが、時間を作ることが出来ず過ぎてしまった。今回、娘夫婦の希望もあって“よい機会を得た”と、喜んでの旅となった。

筑波山に連なる山々を右に見て、道がよくなつた代わりに木々がなくなり、西の方には学園都市に続く建物が多くなった。この辺り三十年位前、史蹟を巡る会で訪ねた時は、広々とした平野の中に筑波山が聳えていた感動と、小田城を真つ二つに突っ切って筑波線が走っている状況に驚き残念だった思い、今回整備され公園化した小田城跡に立つて、こういう形で歴史を伝えるのかと複雑な気持ちを感じた。発掘された資料や展示物が訪れる人々に確り歴史を伝えてほしいと願った。強い小田氏も佐竹氏の勢いに屈した日をさぞ無念であつたろう。土浦へ行かざるを得なかった思いを私たちも胸にして小田の地を離れた。土浦へ移ってからも何度となく焼かれ、建て直し立ち上がりつないできて現在の寺があり、そこが私の祖母の実家になる。

寺(等覚寺)には、遅れての訪問になってしまったが、隠居した前住職にお会いできた。

祖母の兄さんの孫にあたる人で私とはほとんどいいう関係になる。九十歳とは思えない程、姿勢はよく、表情は明るく、声も言葉も歯切れよく思い出話しが伝わってきた。祖母の面影がそここに偲ばれた。三〇四歳の頃、桜川の水が土浦の町を覆

った時、寺の高い床下迄水が入り町の人が沢山避難してきて、はとこと姉が玉里に世話になったことも確り覚えていて、懐かしい、すぐにでもお邪魔したいとのことだった。話しは尽きなかった。人に歴史あり、生きてきた時代も知り、地域のことも伝わって幾つになっても人と話すことの楽しさを改めて味わったひとときだった。

あの日、はとこが話してくれた沢山の話しを通じて、ちよつと以前の田舎や小さな町の主人公、必ずそこには坊さん、医者、お巡りの三人がいた。人情溢れる懐かしい時代を思い起してくれた。玉里御留川の勉強中に先生から聞いた土浦の医者のことが頭に浮かんだ。出島へ何回も足を運んで病人の治療にあたった、同時代の人だから尚親近感をもてた。

はとこは高校生時代に突然父親が亡くなって、その日から家と、寺の大黒柱となった。それからの生活は大変だったとのこと。未だ住職の資格もないのに、葬式の知らせがあると何処までも行かねばならなかった。お檀家は町内より田舎の方が多かったので、行き来にも時間がかかったし天候にも悩まされた。

出島から知らせが来ると、数少ない舟の時間を見ておくのがまず第一、河口港からポンポン蒸気船に乗ることになる。用事があって船に乗る人、途中で降ろす荷物、配布する郵便物を乗せての出航は午後が多かったと。夕陽がきれいな日、月が輝き始める時間、雨の日も、寒く冷え込む日、汗が流れる日もあった。知り合い同士か、大声で話している客同士、さまざまな人間模様を見聞きして退屈ではなかった。向こうに着くと

「旦那さん、ご苦労さまです」との出迎え

心の中で、「俺はまだ学生だよ」と叫んでもそうは見えてくれない。畏れ多い気持ち半分、一応堂々としていたという。こんばん提灯の灯が足元を照らしてくれる。心細い気持ちも半分以上、それでも暖気に出さず付いていったと。当家は暗い森の近く、はだか電灯の中に多勢の人が集っていてくれた。煎餅布団に座つての読経が始まる。大声で泣く人、啜りなく声が入り乱れて、夜道を吊いの列が墓にむかう。吊いが済んで戻ると、それから打って変わって大盤振る舞いだった。

「まあなあ、どうぞ」

「いや、未成年だから」

「そんなお堅いことはいわずに」とすすめられお酒も覚えてしまったとのこと。大分遅くなつてしまつたが、明日もあるのでお休みにと、案内された部屋、入った途端冷やつとした。頭はずきずきする。早く寝なくてはと、布団の中に入つたがこれまた冷々した。煩い長く、布団を干す間もなかつたのかと憶測したが、酔いも冷めんばかりだった。体を伸ばし足り縮めたり、横になつたり伏せたり仰向けになつたり、とうとう一晩中寝付けなかつた事もあつたという。「ゆつくり出来やしたか、朝飯も出来やした。その後墓参りもありますんで・・・」の声に重い頭を上げた。墓参りも済ませ、昼飯もよばれやつと正氣に戻つたような気がした。

「うまいこと、うまいこと、良い声だな」部落の女達の声がする。

「いや、若い坊さまはいいな。どっからみてもいいな」

「隣り部落の坊さまは、遣ること、成すこと遅くて鈍くて時間がかかる」

「それは、しゃーんめえ、年寄りなんだから、わつはつはつは」

「今度は何つくだ。今度は男てえらと、女てえらがよばれんだ。うまいもの作っぺ」

片付けが終わつたら、男、女の手伝い衆が、よばれる席を作るらしい。

「土ん中は温かいのか」冷たかつた。可哀相にな」亡くなった先のことまで心にかけている。おしゃべりはつきない。船着場まで送ってくれた。

「天気もよく、よかつた。よかつた。氣をつけて帰つてくたせい。」

「波は強くあんめえかな」

「先代住職が亡くなつた後、苦労が多いね」

と、あれも、これも心配してくれる。懐は温かい。今夜は温かい布団で寝て明日は学校だ。学校へ行けば行くで、二日分の勉強をどう取り戻すか、悩みは次々と湧いてきた。

筑波・小田の方へ行く時もそれなりの苦労は就いてまわつた。先祖の地の方だから、何ヶ所かの部落にお檀家があつたそうだ。歩ける範囲は歩き、自転車借りて行く時もあり、場所によつては、舟で桜川を上つていった。お布施もお金ばかりではなく、物を頂くことも多かったという。季節によつて重い物が手に肩にぶら下がり、自転車の荷台に括りつけられて、舟に積まれた。頂く有難さもさることながら苦しさがあつたとか。しかし住職を亡くした寺の暮らしにとつては有難いことばかりだったという。この部落方面での酒のつまみは必ず佐竹の話し、城を潰され、土浦まで押し寄せて行つたこと等、【戦国時代の怒念を拭ってくれような話が多かつた。又筑波線に乗っていったこともある。迎えに来てくれた人と駅から田舎道

を歩くのも、暑さの中、風吹く時、雨に打たれて
とろろあつた。漁場の人も山間、農家の人も、
人との別れは同じだ。その土地で共に生きてきた
者への思いは変わりなかった。

話は沢山あつて長く長く続いたが、お巡りさ
んとの遣り取りも愉快だった。今も残る飲み屋街、
友達に誘われて行ったことは度々だった。ある明
け方、下駄の響きも心地よく、いい気分の残って
いる温もりの中で自分と呼んでいる声を感じたが、
聞こえぬふりをして歩き続けた。

「おーい。おーい」

何度と呼ぶ。俺は「おーい」という名じゃないと、
声を大きくして鼻歌交じりで歩き続けていた。自
転車を止めて前に立ち塞がったのはお巡りだった。
「おーい、と呼んでいるのに聞こえないのか」と、
怒鳴っている。

「私はおーいという名ではないし、私のことを呼
んでいるとは思わないし、返事をする必要もない」

「お前の他に誰もいないだろう」

「そう言われても誰がいようといまいとしらん。

今は自分ひとりの世界の中で歩いていた」

「まあまあ、そう言わず、兎も角お前のことだ」

「私はお前という名じゃないし、家はすぐ近くだ」
切がなく二人の遣り取りは続き半分は、お互いに
大人げないと思つたことだったろう。

と笑って話してくれた。少し前の田舎や小さな町
の主人公のようだった。

沢山の人に出会い、話しをし、生きてきたが恋
をしなかったというか、結ばれる人を見つけ出せ
なかったというのは人生の中では悔いが残る。と
笑って話してくれたが、何処か淋しさも感じた。

コロナのことで暗くなりがちだった今年の暮れ

に来て、とてもすてきなほどこにあった。苦労は
沢山あつたことだろうに。一つ一つ越えてきたか
らこそ、今の明るさ、動じない姿勢、生き方に表
れているのだらうと、見つめていた私がそこにあ
つた。何十年も会うこともなくいたはとこ同士、
こんな機会をもてたことをとても喜んでいて。そ
の後、まもなく玉里の寺へ尋ねてきてくれた。そ
の日撮った写真は祖母にそっくりだった。はとこ
からみて私も祖母に似ていると思つただらうか。
こんな身近な行き来がもつと早く出来なかつたか
と、月日の流れを恨めしいと思つたが、今だから
つながつたのかもしれない。

今年の目標

小林幸枝

新年！

おめでとうございます。

コロナ禍にて、色々あつた1年でした。

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

2021年の目標

私の2021年の目標は、動物介護士、老犬介
護士、愛護動物虐待防止管理士、介護福祉士、認
知症介助士の資格を取得することを目指そうと決
めました。

救助犬、探索救助犬、災害救助犬、などの救助
士の資格を取得し、救助犬の養成をすることがで
き、役に立てたらいいなと考えています。

将来は、田舎か山林を購入し、ドッグランを作
りたい。またドッグカフェ、猫カフェを持ちたい
と夢はふくらんでいます。

また、茨城県歴史文化検定を学んで受けたいた
も思います。

広大な夢ですが、今年一年、目標を持つて頑張
りたいと思います。

どうぞよろしくお願いいたします。



〈父のこと 28〉

菊地孝夫

読者の皆様、明けましておめでとうございます。
今年もよろしくお願いいたします。

昨年は、コロナに明け暮れたといつていい一年で
した。

早いもので、「ふるさと風の会」に参加して、もう
すぐ3年になります。

毎月、原稿用紙の升目を埋めていく作業は、なか
なかに大変です。

始めは苦戦しました。毎月の締め切り前に、白井
代表のお宅まで届けました。白井代表には、それ

をパソコン入力するという面倒をおかけしてしまいました。

今は、パソコンのキーボードから原稿を入力しています。それを、USBに落として木村さんのところへ届けるのですが、最近、締め切りを過ぎてしまうことがあり、申し訳なく思っています。

「常陸旧地考」の入力では、漢字の検索がうまくいかず、中にはどうしても見つからない漢字も2、3有って、やむなく近い文字で代用しました。思いがけ余計な時間がかかってしまいました。

父のこと、という表題で書いて来ましたが、このところは少し離れた事ばかり書いています。原稿は数年分はあるのですが、一つの家族の歴史をこれ以上書きつづけるのもどうかなと思羽陽にもなつて、そろそろ一区切りつけようかなと考えています。

3、4本の原稿があるのでそちらの連載をしようと思っています。

ふるさと、のテーマからは外れてしまいましたが、多様な読み物があつたほうがいいのかも思えるので、新たなチャレンジをしていきます。

白井代表が目指したものは離れたものになるかも知れませんが、もともと書き手を養成しようとの考えもお持ちだったようなので、その点はお許しただけだと思います。

この「ふるさと風の会」も今年で15周年を迎えることになりました。

先輩方の努力により、ここまで途切れることなく続いてこれたのは、地方の小さな集団としては、

ある意味で偉業と言えるのではないかと思います。このところ、様々な理由でいくつかのイベントも中止のやむなきに至って、この先20周年の節目を迎えられるか、いささか心もとない気がします。多くの読者の皆様に支えられ、今日まで至ったわけですが、会員の高齢化も進み、でき得れば、さらに多くの新しい会員が入会してくだされば、この会もさらに存続して行けると思うのです。

毎月書かなくても、単発の原稿でも大歓迎です。

或いは、月二階の集まりに来ていただいても結構ですし、印刷日にお手伝い頂くだけでも、大助かりです。

御茶菓子を摘み乍ら、あれこれ世間話をするのも、時にはいいものです。

文章を書くというのはさほど難しいことではないと思います。書きつづけているうちに、自然と文章もこなれていくようです。

私などは、毎回の様に白井代表にお叱りを受けていましたが、全く馬耳東風でしたからね。(笑)

本を読むのが好きな人はたくさんおられますが、その感想などを文章にしてみるのもいいかもしれませんね。

或いは、今はやりの「自分史」をここで書いてみてはどうでしょうか。本格的な「自分史」を作ってみたければ、プロの編集者を紹介できます。

俳句や短歌、詩歌などジャンルは全く問いませんし。日記を書くぐらいの気軽な気持ちでいいのですから。

パソコンを使うのが苦手なら、手書きの物でも十分です。

改めて思い返してみますと、原稿を書く為にあち

らこちらとほつつき歩いて、様々な方とお会いして、そのつど、新たな発見や勉強になった日々でした。

これからも、体力と知力の続く限り、会員の皆さんとともに書きつづけていこうと思っています。



風と共に 《理》

大輪啓展

九 生

今回から数ヶ月間は、
毎月違ったテーマにて書かせて頂きます。

今月のテーマは、「生」

私はこう思います。死ぬ為に生きているのだと。

死ぬ為、とはどういう事か。

日進月歩で成長し続ける今世ではありますが、私の知る限りではまだ、人間はいつか死ぬ運命となっているはず。

寿命、生まれてから死ぬまでの時間は勿論それぞれです。

100歳を超えてなお現役バリバリの肝っ玉先輩もいれば、何の因果か僅か数年でこぼれ落ちてしまう命もあります。

そして其処には、残念でした、大往生でした。つてだけの話なのでしょうか。

私には、すべからく1つ1つの大切な命が終わりを迎えた時、その人にとって死ぬ為に生きてきた意味が、解き明かされるのではないかと思うのです。

日本という狭いながらも、世界的に見れば裕福な位置付けで、そんな枠組みの中から感じ取っていくものですから、物事の一边ではあるうかと思えますし、全ての生に対して当てはまる物ではないかもしれませんが、

仮に、

普遍的に本来あるはずの寿命があったとして、それを全うした形での場合はどうでしょう。

80歳前後、全うした命の終わりを迎える時、其処にどんな輪があるのか、大切な人達に囲まれ惜しまれながら別れていくのか。狭い部屋で誰にも気付けられる事なく終わっていくのか。多くの人は前者であつて欲しいと願う筈です。

その人が、誰にどんな影響を与えたのか、生前に感謝される行いが出来ていたのか、自分自身に胸を張れる生き方が出来たのか。

そんな事の積み重ねが、多くの人が望む様な大切な人に囲まれて、最期の時を迎える事に繋がっ

て行くのだらうと思います。

人の欲にはキリがありません。

お金持ちの人は、もっとお金が欲しい。

見た目の美しい人たちは、もっと綺麗になりたい。

明日のご飯を心配している人は、お腹いっぱいご飯が食べたい。

寒くて震えてる人は、暖かく過ごしたい。

この様に言葉にしてみると、多少裕福な人達ほど、余計な欲にまみれてしまう様に思います。

勿論忘れてはいけないのは、今貧乏でも、裕福になったら、上記前半の人達といつ同じになるか分からないという事です。

過ぎたるは、猶及ばざるが如し

こんな言葉がある様に、あり過ぎて物な過ぎても良くない、バランスが大事だと言う事ですかね。

簡単そうで、とても難しいのだと思います。

また、こんな言葉もありますよね、無い物ねだり、隣の芝生は青い。

他者と比べたり、実用性の無い物を見た目で欲しがったり、こんな事も欲求を満たす為の事なのかも知れません。

そして、僅か数年で命を落としてしまう、事故なのか病気なのか事件に巻き込まれてしまうのか、どんな理由にせよ、小さな子供が亡くなってしまう

うのは悲しい出来事です。

ですが、いずれの別れを経験しようと、残された人達はこれからも生き続けなければなりません。ですが、

家族や仲間と囲まれながらこの世を去っていく、そんな人達の生き様をちゃんと理解しようとしていますか？

小さく僅か数年で亡くなってしまった、そんな子の頑張りが分かりますか？

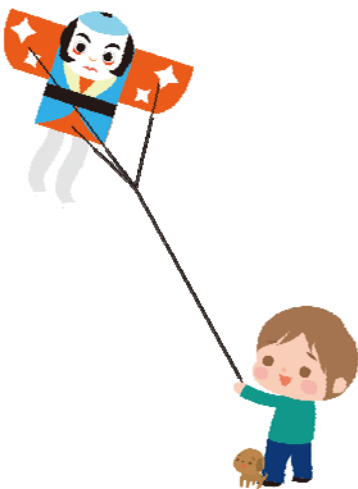
その人達はあなたに何を伝えようとしていると思いますか？

身近な人の死は、多くの人を成長させる、心をもっと豊かにしてくれる、

悲しい事ばかりではないんです。

何かの意味を持って生を成し、本来あるはずの生き方が出来ずに、道を外れてしまう方も居ますが、本来あるはずの生き方を成したのなら、冒頭にある通り、死ぬ為に生きた証がそこにはきつとあるはずで

生き様こそ死に様なのではないでしょうか。次月のテーマは、「知」とします。



【風の談話室】

《読者投稿》

やさと暮らし(47)

さと女

晴れの続いた11月、此処にきて水不足が・・・？
12月に入ると、大寒波の襲来・・・。大雪で数千台の車が高速道路で立ち往生、我が家の水族館は大丈夫か？

・青空のなか、突然にイチゴ屋さんへ集合が掛かる、ビニールハウス撤去のお手伝いだ。凡そ1時間程で終了した。そしてお昼は、奥さん手作りのご飯、程よい運動の後のご飯は美味しい。農家さんと、ここで出会った人たちが、お互い楽しく元気に過ごしていけること、嬉しく思う。

・好天に誘われて、空の駅“そ・ら・ら”へ。今日は“そ・ら・ら”の縁日。友人の「オカリナアート JOK」野口さん夫妻が、参加すると言うので応援がてら、会いに行く。会場には、いろいろな遊び、体験教室など親子連れで賑わっている。中央広場では、オヤジバンドの演奏や門松づくりのワークショップが行われている。16日20日は、また、素敵な雑貨のマルシェが開催されると言う。

・12月に入り、私の住む集落も大分景色が変わった。先週末ではオレンジ色で賑わっていた柿の収穫も終盤・・・。そんな中、何百個もの実をつけているイッポンの柿の木。受粉樹だそうです。果樹園主は食べられるよというけれど、カラスも

食べない・・・？

・ここ数日の散歩中何人もの知人に会い、柿を頂いたり柚子を頂いたり隼人瓜を頂いたり、また銀杏を拾いに来るよう電話があつたり、もちきれず車で出直したりもした。それらの頂き物を、友人の所にお裾分けした、何かと楽しい思いをした。このコロナ騒動の中、医療の現場で頑張っている友人達の事を思うと、申し訳ない気持ちです。

・今日も一日無事終わり、主は池の魚の研究を熱心に・・・？日々の散歩で八郷の自然を満喫して、夕方は久しぶりの知人の訪問、1時間程近況など語り合い、何気ない日常。ちよつと違ったのは、夫の喜寿の誕生日だった、旅友から送られたアメリカンフラワーを抱いての記念写真を撮る。

・久しぶりに知人が泊まる(2人)というのでの買い物をしてきた。するとその知人から、泊りを中止するとのメールが届いた。昨今のコロナ感染拡大で、迷惑をかけたくないから、またの機会にしますとの事。残念やらほつとするやら、そんなわけで、今日は何の予定もなく、朝から、こまごまと台所に立った。頂いた沢山のユズは、先日ユズジャムとユズ味噌を作ったので、今回は干し柿のユズ巻を作ってみた。頂いたサツマイモは蒸して干し芋に、夫は1か月前から仕込んでいる柿酢を濾したりしていた。どれもなかなかの出来で自己満足の世界です。

新年に

燕石(えんせき)

この原稿は、暮のうちに書いていたので、まだ年は明けてはいないけれども、読者の皆様、明けましておめでとうございます。今年も、このふるさと風の会の読者でいてください。

今年も、ほとんどの人にとってはコロナ・ウイルスという厄介なウイルスと対峙しなければならぬ年になってしまいました。

(おそらく、少なくとも今年いっぱいには覚悟しなければならぬし、或いはまだまだ4、5年かかるという見通しの方もいらつしやいます。)

こうなると、一人一人が、考え付く限りの自衛策を取らなきゃなりません。

まずは、基礎体力をつけて、栄養のあるものを食べて、睡眠を十分にとって免疫力を高めることが大事でしょうかね。

いつそのこと、このさい、日本中で総ての仕事を一月か2月ほどやめにしてみてはどうでしょうかね。経済的にマイナスといっても、あくまでも短期的なものであり、これが効果があれば、若干のマイナスは取り戻せるし、大きく見れば、プラスになると思う。

(もちろん、どうしても休めない医療関係者や消防士などは除いてですが。そして、手すきになった人がこの人たちをサポートすればいい。子供さんを預かるとか、家事を替わってあげるとか、できることはいくらでもある。)

まだまだこの流行は終息の気配がみられないので、ゆつくり体を休めて、疲労しないようにするのが肝心だと思うのです。

ウイルスは、すでに全国に蔓延してしまったので、いまさら「3密」なんて言っても、もう手遅れだし、無症状や軽症の感染者にしても体には何らかの後遺症が残ると思われます。

法律を改正しなければならぬ、とかいうことを言い訳にして、ずるずると対策を先延ばしにした結果が今の状況を招いてしまったのだし。

いまさらのことだけれども、今のような状況が、まだまだこの先暫くの間は続くことは容易に想像がつくことだし、世界的な広がりを見せているので、国際的にも協調しなければならないと思います。

イデオロギーや社会体制の違い、経済的な対立などはこのさいは取敢えず脇に置いておいて、

(このところ、何かといえばアメリカファーストとか、東京ファーストとか、大阪ファーストとかいう輩たちが多いけれども)

狭い考えを捨てて、あらゆる英知や資金を結集して、この厄介なウイルスと対抗しなければいけないのではないかと思えるのです。

トランプたちのような、己のところだけ良ければ、ほかのやつらなんかはどうでもいいという考えは、まったくの誤った考えだと思うのですよ。

いまではもう、ウイルスは国境を超えてあらゆる国に広がり続けてしまっているし、今更のようにあわてて鎖国政策などを取ったとしても、はつき

り言って時すでに遅しの感があるしね。

本当の意味の専門家の意見を、素直に聞いて行動することがいいことだと思う。

たくさん専門家が登場して、さまざまな意見を言うので、判断に迷ってしまいますが、ここ一年ほどの発言を追ってみると、ほぼ正確な見通しを語っていた方がおられるので、私はその方たちを真の専門家だと思っています。

権力者におもねって、発言を枉げているような人はとても専門家ではない。

ふだんなら別にかまいはしないが、現在のような深刻な状況下では、それらの連中はただ有害なだけである。いづれ、現在の事態が鎮静化したときこの人たちは口を拭って素知らぬ顔をするに決まっている。

かわいそうなのは、若者たちである。就職氷河期が有ったり、大災害が起きたり、長い不況があったりとこのところ災難続きである。また

正月や めでたくもなし
ウイルス禍 燕石



茨城県の難読地名とその由来 (10)

木村進

天寶喜〔あまぼうき〕 つくば市(旧荖崎町)

角川日本地名大辞典には、天寶喜は稲荷川中流左岸の台地に位置し、縄文時代の天寶喜貝塚・天寶喜西遺跡・C遺跡があるとあり、天寶喜村が江戸期から存在したと書かれているだけで、名前の由来は書かれていない。

一方平凡社の茨城県の地名には、元和年間(1615-24)に創建、正徳元年(1711)再建と伝える厳島神社があり、天寶喜の地名とかかわりを有するといわれる「宝剣記」や弁財天像があると書かれている。

では、まずこの神社にかかわる伝説を書いておこう。

「昔、当地の原野にひとつの塚があり、夜々不思議な紫の光を発しはじめたので、里人が恐る恐る近づき調べたところ、一口の剣を発見した。里人たちは、これは神様が天から降らせた霊剣に違いあるまいと、「天の宝剣」と呼び祠を建てて納めた。

そして占ったところ、「是正しく弁財天の宝剣なり、ゆめ忽せにすべからず」と占いに出たので、里人達は大いに喜んだという。

ところがある時、一人の雲水がこの里に現れ、里人から宝剣の由来を聞かされた。この雲水が背負っていたのはまさに「弁財天像」であり、その弁財天の右手にはあるはずの宝剣がなかったのだ。雲水は厳かに「この里こそ弁財天の鎮座すべき宿

縁の地なり」といい、その尊像を里人達に託し、何処ともなく立ち去ってしまったという。天より降れる宝剣を得、郷民大いに喜び祀ったということから里の名が天宝喜と呼ばれるようになったという。

さて、この地名、神社の名前の伝説はよくあるパターンであるので、このまま地名になったとは思われない。地名に佳名（けいな・縁起のよいよい名前）を充てることは江戸時代やその前からかなり行われてきた。この「天宝喜」も恐らく似たような名前で呼ばれていた地名にこの佳名が当てられたものだと思うが、そのいきさつは不明だ。名前の対象となった厳島神社は1615-24年の創建と言われる神社だ。

あまり大きな神社ではなく、厳島神社と言われるように社殿のまわりはあまりきれいではないが湧水池に囲まれている。昔は牛久沼が近くまで広がっていたものと思う。江戸時代の初め頃は牛久沼周辺も洪水などで街道なども何度も変更された記録がある。

この地から宝剣が出たというよりは、誰かが持ち込んだものと推察されるが・・・。
天宝喜村については寛永6年【1629年】に牛久藩領となつときの文書に「天宝喜村」の記述がある。

さて、神社名が先か？ それとも村名が先か？

樫木【つきぬき】つくばみらい市

「樫木」はそのまま読めば「つがのき」だが、この地名では「つきぬき」と読む。

「ツガノキ」＝「樫」（ツガ）です。松の一種で大きな木となります。樫池＝ツガイケで知られてい

る漢字です。人名にも「樫木」姓が茨城県でわずかにいるようです。それもまた「つきのき」「つがき」などと読むようです。

名前の由来は「ツガノキ」が多く繁茂していたのか？ もしそうならなぜ「つきぬき」などと読むのだろう。

一方、栃木県に「都賀郡」（つがぐん）があるが、この名前の由来は「ツガノキ（樫木、都賀乃木）」が多数繁茂することに因んだのではないかとしていた。

「樫」を使用した地名は他には見つかりませんでしたが、「つきぬき」で調べると、

・栃木県那須塩原市槻沢（つきぬきざわ）がありました。

「槻（つき）木」はケヤキの古名だそうです。ですから「つきぬき」というのはケヤキ＝樫のことになる。

どこかで「ツゲノキ」と「ケヤキ」を混同して、「ツキヌキ」となったのかもしれませんが。

まあ理由はわからないが、意外にこれが正解かもしれないですね。

場所がつくばみらい市というよりはもう「水海道駅」（常総市）の直ぐ近くで小貝川に近く、洪水被害などもよくあった場所のようです。

関本肥土【せきもとあくと】筑西市

角川日本地名大辞典では、「本郷ともいう。鬼怒川中流左岸に位置する。肥土は川沿いの肥沃な低地の意。」とある。

関本肥土村は江戸期の常陸国真壁郡にあった。またこの関本だが、平凡社の茨城の地名では、「古

代には常陸国の最西端の要地として新治関が設置したと考えられる。」と書かれており、この関の中心だったと思われます。

江戸時代には関本村がいくつかに分離し、上、上中、中、分中、肥土、下などになり、肥土（あくと）は本郷とも呼ばれました。

この地域は肥沃でかなり大きな村でしたが、鬼怒川の氾濫も多く被害も多かったようです。

この「肥土（あくと）」ですが、これについては柳田國男の地名の研究に全国の「アクツ、アクト」などの地名が調べられています。

これによると、阿久津は常陸国志卷三、那珂郡常石郷の条に、「阿久津は常陸の俗に低き地をさして呼ぶ名にて、多くは川に添ひたる所なり」とかかれていて、多くのものを引用し、坪の漢字もハナワを塙と書くのと同様に、共に近世和製の合意文字であらう。としています。

また、阿久津、坪の地名は関東の限られた県（茨城、千葉など）に多く見られ、その他の県では、「阿久戸、悪途、悪土、悪田、安久田、悪太原、芥川」などの地名を挙げて考察をしています。

「悪」の字が使われた経緯については、昔は水害頻繁におき、耕作には適しない地であったためにつけられたが、次第に堤防の術も進み、排水も行われ、交通も便がよくなり人々が集まりだしたのではないかと書かれています。

関本肥戸（あくと）も、古代は悪戸などと同じ川沿いの低地で耕作には適していなかったが、次第

に交通の要でもあり、堤防・排水技術などで逆に耕作に適した地に成っていたことから「悪土 ↓ 肥土」と書く様になったものと思われます。



常陸旧地考(7)

菊地孝夫

○荒原 あれはら

和名鈔に、行方郡荒原郷あり。郡の中に今あるところを知らず。國誌に荒原(あれはら)とあり、小宮山昌秀の考に、いま玉造村を荒原郷開発郷と里人云い伝う、こなるべし。

風土記に現原とある同じかるべしといえり。風土記行方の条に、倭武天皇天下狩り巡り云々さらに車駕を廻らして現原之丘へ御幸して御膳を仕る云々。

○道田 みちた

和名鈔に行方郡道田郷あり、郡の中に今あるところを知らず。

○行方 ナメカタ

和名鈔に行方郡行方郷あり。今なお行方村在り。これ成ること郡の条に言えるがごとし。

○曾禰 そね

和名鈔に、行方郡曾禰郷あり。郡の中に今あるところを知らず。

風土記の行方郡の条に、曾尼村にはむかし佐伯がいた。䟽禰比古という。「ソネ」を名のる者が村に多くいていま驛家を置き曾尼の驛という云々と有る。

○板來 いたこ

和名鈔に行方郡板來郷あり。今の本に坂來と誤れり。今の潮來村これなり。さて、潮來と書くは常陸の言葉に潮をイタと言えはウシオ來るの意味にて、かかるなりと言えう。潮をイタという事いかがあらん。鹿嶋に潮宮と書きて、イタミヤと呼ぶ神あり。これも覺束なし。

國誌に今の板來とあるは、当時そのように書いたもの。潮來と書くのは、近世のことにて、元禄十一年(1698)に、潮來と書き換えたるなりと、小宮山昌秀言う。

加茂翁の冠字考に常陸國に板來と書きて潮來と呼ぶ郷有。アシタコというべきを、アシの反がイなる故、おのずからイタコと言うなり。斯く書きしこともありしにや。

風土記行方郡の条に、板來村近く海浜に臨み、驛家を置く。これを板來の驛という云々と有る。

干時、賊党盛んに音楽を聴き房を挙げて男女悉くいで來る浜を見て、歓咲建借間命、兵士に命じて堡〔星〕を閉ざし背後より襲撃して種族を悉くとらえ、一時に焼き殺し、この時いたく殺すと言えるところから、いま伊多久之郷という云々。

日本後紀に弘仁六年(815)十二月戊午常陸國板來驛を廢す云々など見える。

*・加茂翁・賀茂真淵、江戸期の国学者

○餘戸 あまりべ

和名鈔に行方郡餘戸郷あり。郡の中に今ある処を知らず。今考えるに、新治郡の柏崎村のうちにヨゴ坪という処有。これ余戸にて、いにしえの余戸というものの名の残ったもの。

出雲風土記に餘戸の里(神龜四年(727)編戸により天平里古くは餘戸といえり)と見える。餘戸というものはいずこにても皆これ也。

○白鳥 しろとり

和名鈔に鹿島郡白鳥郷あり。郡の中に今在る所を知らず。

風土記鹿島郡の条に郡北三十里白鳥の里。古老曰く、伊久米天皇の世に白鳥あり。天より飛び来て童女となつて夕べに上り、朝に下る。石を摘みて池を作る。その堤を築かし、いたずらに日月を摘みて築〔堤〕壊して作りえず。乙女らは、「しろとりのはがなるにこなむともあらふまめうきはこえ」

この歌を唱いて天に上る。また來らず。この由で、白鳥の里という云々。

郡の中、中村より神戸あたりまでの村々白鳥の郷なりと里人のいう、これなるべし。

○下嶋 しもしま

和名鈔に鹿島郡下嶋郷あり。いま本嶋を鳥に誤っている。國誌に下嶋〔之毛志麻〕とありて地の有無を記さぬはこれもその頃までは在りしにや。そののち名の変わり、知られなくなった。

○鹿嶋

和名鈔に鹿島郡鹿嶋郷あり。郡条に言えるごとく今の鹿嶋村をはじめ板戸、沼尾、大船津辺りに懸けて広く鹿島の郷なり。

○高家 たけへ

和名鈔に鹿島郡高家郷あり。カキへと訓点有。郡

の中に今在る所を知らず。さて高家は行方郡の高家の条に言タケへとタケイと音近し。今の武井村これなり。

○三宅 みやけ

和名鈔に鹿島郡三宅郷あり。郡の中に今在る所を知らず。

國誌に三宅〔美夜介〕と訓注のみにて地の有無を記さず。その頃までは在りしにや。この〔美夜介〕というのは屯宅、屯倉などと書き、また地名姓などには三宅と書きて皆同じ。

これは昔、国々ところどころに朝廷の御田あつて、田部というものをして作らしめ、その地に官舎、御倉など建て、その御田に成れる稲穀を収めしめし官舎にて、御家と言へるなり。

さてこの官舎をもその御田をも〔美夜介〕と云うなり。後世〔美夜介〕は廢れてその名のみ土地の地名となつて残り諸国に多い。

万葉集に鹿島郡苅野橋に大伴卿別歌として、

「牡牛乃三宅之瀕指向鹿島之崎尔狭丹塗之小船儲云々泣耳八将哭海上之其津於指而君之已帰者」云々

○宮前 みやさき

和名鈔に鹿島郡宮前郷あり。今なお郡中に宮前郷村在り、これ也。

國誌に宮前、いま案ずるに宮崎、茨城郡に属すとあるは、國郡古圖に檜沼浦を超えて鹿島郡の北の方、磯前神社のあたりまで茨城郡としたるによりたる誤り也。

鹿島郡と茨城郡との境は檜沼浦を限つて磯浜まで鹿島郡也。宮ヶ崎村は檜沼浦の南方にて即ちこのあたりより磯浜まで今なお鹿島郷也。

○宮田 みやた

和名鈔に、鹿島郡宮田郷あり。郡の中に今在る所を知らず。

國誌に、宮田は今は茨城郡に属すと見える。今、茨城郡の南方に寄つて、新治郡の堺に宮田と言へる小村在り。

これは、またまた茨城郡の地にて鹿島郡とまざるべき地勢にあらず。

さて小宮山昌秀の説に今の磯浜村の旧名、宮田村という、これあらんかという。これ然るべし。

國誌に茨城郡に属すとあるは、國郡古圖によりたるにて、その頃今の磯浜すなわち宮田と言ひしと見える。

○中村 なかむら

和名鈔に鹿島郡中村郷あり。今なお鹿嶋村近く中村あるこれなり。

○松浦 まつうら

和名鈔に鹿島郡松浦郷あり。郡の中に今在る所を知らず。

風土記に高松浦在り。同地にて高天原の東南の海辺なるべし。猶、名所部高天原の条に言うべし。

○中嶋 なかじま

和名鈔に鹿島郡中嶋郷あり。郡の中に今在る所を知らず。

郡の中に中居村あり。これではないか。

○軽野 かるの

和名鈔に鹿島郡軽野郷あり。郡の中に今在る所を知らず。

里人の言へるは、神池という在りそのあたりの野を「かるの」と言うべし。

風土記に軽野、万葉集に苅野と有り皆同地なるべし。

○徳宿 とくすく

和名鈔に鹿島郡徳宿郷あり。今なお郡の北の方に徳宿村在り、これ也。

*・・銚田市徳宿

○幡麻 はたま

和名鈔に鹿島郡幡麻郷あり。郡の中に今在る所を知らず。

國誌に幡麻、波多麻、いま波玉とあり、次に和名鈔に載る所の今ある徳宿、中村、幡麻、云々とありその頃までは波玉といへる地在りと見えてゐる。今はさる地聞かず。

○大屋 おおや

和名鈔に鹿島郡大屋郷あり。郡の中に今在る所を知らず。

いま案ずるに、檜沼浦の東南に沿いて松川村と夏海村の間に大谷川村在り。これ成るべし。今は茨城郡に属しけり。郡圖には鹿島郡也。

○諸尾 もろお

和名鈔に鹿島郡諸尾郷あり。郡の中に今在る所を知らず。

○新居 にいい

和名鈔に鹿島郡新居郷あり。郡の中に今在る所を知らず。

○伊嶋

和名鈔に鹿島郡伊嶋郷あり。郡の中に今在る所を知らず。

國誌に伊嶋は以志麻、今の飯島なりと見る。今なお飯島村ある、これ也。

○上嶋 かみしま

和名鈔に鹿島郡上嶋郷あり。郡の中に今在る所を知らず。

○入野 いるの

和名鈔に那珂郡入野郷あり。郡の中に今在る所を

知らず。國誌に入野〔以留乃〕いま茨城郡に属す
と見える。今なお茨城郡の中北の方に寄つて那珂
川近くに入野村在り、これなるべし。

○朝妻

和名鈔に那珂郡朝妻郷あり。郡の中に今在る所を
知らず。

○吉田 よした

和名鈔に那珂郡吉田郷あり。國誌に吉田は今茨
城郡に属すと見える。今なお茨城郡につきて吉田
村在り。吉田明神ましますこれ也。那珂川に近い。

*…現在の水戸市吉田

○岡田 おかた

和名鈔に那珂郡岡田郷あり。郡の中に今在る所を
知らず。

小宮山昌秀の説に久慈郡に岡田村在り、これでは
ないかと。なおよく尋ねるべし。

○全隅 またくま

和名鈔に那珂郡全隅郷あり。郡の中に今在る所を
知らず。

國誌に全隅は〔麻太苦萬〕いま案ずるに又熊、茨
城郡に属と見える。今なお茨城郡の北の方に寄つ
てまた熊村在り、これなり。那珂郡に近い。

*…水戸市全隅、までくまとも。

○安賀 あが

和名鈔に那珂郡安賀郷あり。郡の中に今在る所を
知らず。國誌に安賀 赤と見える。赤という村は
聞いたことがない。

小宮山昌秀の説に、茨城郡に今赤沢村在りこれに
は非ざるや、と有つて、茨城郡の中西北に寄つて
那珂川近くに赤沢村在り、これなるべし。

○大井 おおい

和名鈔に那珂郡安賀郷あり。郡の中に今在る所を
知らず。

神名帳に那賀郡大井神社あり、同地なり。

いま案ずるに、風土記久慈郡条に蜜筑里村の中に
浄泉あり大井という云々、その東南、東海に臨め
り、云々と見えたる。この蜜筑の里なる大井の地
に奉れる神社を、大井神社と称え、まつれり。

この神号の広く成り、この地を大井の里ともいえ
るより、和名鈔にも大井郷と載つてゐる。別に
筑之郷を載せていない。これによれば、大井・蜜
筑同地と思われる。

さて蜜筑は今の水木村にて多珂郡に属してゐるけ
れど、風土記には久慈郡に属せり。これにより考
うるにこの大井郷も古くは久慈郡なり。

さて、延喜式撰ばれし頃は、既に那賀郡に属した
れば、神名帳には大井神社を那賀郡に載せてゐる。
其の後和名鈔もまた那珂郡に大井郷を載せてゐる。
國郡古圖に、那珂郡と多珂郡の間に久慈郡の茂宮、
竹瓦、南高野など言う村々は東海に臨みて、その
次に多珂郡に属して水木村在り。

さて往古はこの茂宮、竹瓦、南荒野あたりより水
木村まで那珂郡なのを、其のち今のごとく久慈郡
になった。

さて、水木村の次の河原子、助川、富田、川尻あ
たりまで久慈郡の地にて東海に臨んでゐる。今助
川は多珂郡に属しているけれど、風土記・和名鈔
ともに久慈郡に属したれば、このあたり往古は久
慈郡なること疑いなし。

○河内 かふち

和名鈔に那珂郡河内郷あり。
國誌に河内〔加都多〕いま上・中・下河内に属す
と見えている。今なお那珂川に付きて上河内村、

中河内村あり、これなり。國誌に訓点〔加都多〕
とあるは方言なるべし。

和名鈔にもカフチと点したり。また郡名には甲知
と点している、ゆえにカフチとよむべし。

風土記那珂郡の条に、狭く栗河に驛家を置く〔本
栗河近く河内驛家、今は元の名に従う〕云々。
延喜兵部式に常陸國驛馬二疋、云々。

日本後記、弘仁三年（812）十月の条に常陸國
安侯、河内、石橋、助川、藻嶋、棚嶋六驛廢す、
云々。

○川邊 かわべ

和名鈔に那珂郡川邊郷あり。郡の中に今在る所を
知らず。

○常石 ときは

和名鈔に那珂郡常石郷あり。國誌に常石〔止幾波〕
いま茨城〔郡〕属すと見える。今なお水戸府の未
に常葉村在り、これなるべし。

○日下部 くさかべ

和名鈔に那珂郡日下部郷あり。國誌に日下部〔苦
佐加倍〕と見える。郡の中に今在る所を知らず。

○志萬 しま

和名鈔に那珂郡志萬郷あり。郡の中に今在る地を
知らず。國誌に志萬、いま案ずるに嶋新田茨城郡
に属すとみえたり。茨城郡に嶋新田村在り。然れ
ども僅かに百石余りの小村なればこれではない。
また新田という名も古き地にあらず。さて今久慈
川にそつて久慈郡に島村あり。これではないか、
なおよく尋ねるべし。

○阿波 あは

和名鈔に那珂郡阿波郷あり。郡の中に今在る地を
知らず。
神名帳に阿波山上神社有。今茨城郡大山村の鎮守

をこの神社なりと言い伝う。同じ地にてこの大山村、古の阿波郷なるべし。なお神社の条に言うべし。

○芳賀 はが

和名鈔に那珂郡芳賀郷あり。郡の中に今在る地を知らず。

○石上 いそのかみ

和名鈔に那珂郡石上郷あり。国誌に石上、以之賀美、いま石神なりと見えたり。今なお石神内宿、石神外宿、石神白方など言える村在り。これ成ること疑いなし。

○鹿嶋 かしま

和名鈔に那珂郡鹿嶋郷あり。郡の中に今在る地を知らず。

ある説に那珂郡多彦村の地内に鹿島というあざの所、今猶あり。鹿嶋明神というもましませり。これ成るべしという。さもあるべし。

○茨城 うばらき

和名鈔に那珂郡茨城郷あり。郡の中に今在る地を知らず。

*…現在の茨城町か？

○洗井 さらしい

和名鈔に那珂郡洗井郷あり。郡の中に今在る地を知らず。国誌に洗井を阿来と訓注したるは誤り也。来の仮字はライ、井の仮字は井にてライにあらず。さしていま案ずるに、洗井はサラシ井と訓むべし。風土記、多賀郡に曝井あり、万葉集に曝井の歌あり、これ同じ地なるべし。なお名所曝井の条に言うべし。

○那珂 なか

和名鈔に那珂郡那珂郷あり。いまなお郡の中、下野國の方により、那賀村有これなり。

○八部 やたべ

和名鈔に那珂郡八部郷あり。郡の中に今在る地を知らず。

いま案ずるに、郡の中西北に寄って、上の那珂村に近く八田村あり、これにはあらざるか。また上の吉田村近く谷田村在り、吉田村よりこのあたり古の那珂郡の地なり。これのことか。そこより南に谷田部村在れども、これは那珂郡に非ず。古も茨城郡で、これには非ず。なお上二つのどちらかなるべし。なおよくよく尋ねるべし。

○武田 たけた

和名鈔に那珂郡武田郷あり。国誌に武田(多介多)いま竹田に作るとみえる。

今なお武田と言う小村在り、これなるべし。国誌にいま竹田とあるは、国誌が撰ばれた頃はそう書いたもの。

*…現在のひたちなか市武田か？此処の武田氏が甲州の武田氏の始祖という説もある。

○倭文 しとり

和名鈔に那珂郡倭文郷あり。郡の中に今在る地を知らず。

風土記久慈郡の条に郡の西口里に静織里あり、上古の時綾の機を織ることを知らず、時にこの村似て初めて織れり。かの名これによる云々と見える。静は仮字にて、倭文織なり。ツオの約はトなればシトリと云えるなり。これを又シジとのみも云いけん。

神名帳に久慈郡に静神社有。これ同地なり。

国誌に倭文(志止利)、今は那珂郡に属す。世伝に志津神社、これ手力雄神なりと見え、今なお那珂郡に志津村在り、志津明神まします。地形も久慈郡にやや近い、これ成ること疑いなし。

齋宮式に「倭文二匹常陸云々」。主計寮式に「常陸國倭文三十一端」等見えたり。立花神社の條に言うべし。

*…倭文…あやおり、絹織物。

*…齋宮式、主計寮式…いずれも延喜式の条文

○高月 たかつき

和名鈔に久慈郡高月郷あり。郡の中に今在る地を知らず。

○助川 すけかわ

和名鈔に久慈郡助川郷あり。郡の中に今在る地を知らず。

風土記久慈郡の条に助川駅家在り、遇鹿という。古老曰く倭武天皇ここにいたりし時、皇后に遇い斯く名付と。幸久米大夫の時に至って、河で鮭を採り、改めて助と名づく(俗語に、鮭古くはすけという)云々。

国誌に、助川〔須介加波〕多珂郡に属すと見え、今なお多珂郡に助川村在りこれなり。このあたり、上古は久慈郡なること、大井郷の条に言えるがごとし。

日本後記に、弘仁三年(812)十月常陸國助川云々、六驛を廃す、云々。

○美和 みわ

和名鈔に久慈郡美和郷あり。郡の中に今在る地を知らず。

○志摩 しま

和名鈔に久慈郡志摩郷あり。いまなお郡の中に久慈川に沿って島村、小島村在り、この地なり。

○真野 まの

和名鈔に久慈郡真野郷あり。郡の中に今在る地を知らず。

○神崎 かむさき

和名鈔に久慈郡神崎郷あり。郡の中に今在る地を知らず。

＊…現在の水戸市神崎か？

○父來

和名鈔に久慈郡父來郷あり。父來の字訓点なければ、いかに知られず。郡の中に然る文字の村名も見えず、尋ねるに由もなし。

○大田 おおた

和名鈔に久慈郡大田郷あり。今なお大田村有、これなり。

風土記久慈郡の条に「郡東七里、大田郷長幡部之社在り、云々」。

○山田 やまた

和名鈔に久慈郡山田郷あり。今なお下野の堺近く山田村在り、これ成るべし。

○河内 かふち

和名鈔に久慈郡河内郷あり。今なお上宮河内、下宮河内、西川地などと言う村在り、これ等の中成るべし。

風土記久慈郡の条に「郡西北六里河内の里有、もとの名、古々之村なり云々」。

○楊嶋 やなぎしま

和名鈔に久慈郡楊嶋郷あり。郡の中に今在る地を知らず。

○世矢 せや

和名鈔に久慈郡世矢郷あり。いまなお瀬谷村という在り、國誌にもいま、瀬谷と有りこれ成るべし。

○佐竹 さたけ

和名鈔に久慈郡世矢郷あり。郡の中に今在る地を知らず。

國誌に佐竹は今天神林なりと見える。いまなお天神林村在りこれ也。

＊…佐竹氏の起こりはこのあたりなのだろうか？

○高市 たけち

和名鈔に久慈郡高市郷あり。風土記にも見える。郡の中に今在る地を知らず。

○木前 きさき

和名鈔に久慈郡木前郷あり。郡の中に今在る地を知らず。

○佐野 さの

和名鈔に久慈郡佐野郷あり。郡の中に今在る地を知らず。

○薩都 さつ

和名鈔に久慈郡薩都郷あり。佐都宮、今の本に薩を落として、都をミヤコと点したるは誤りなり。神名帳に薩都神社、風土記に薩都の里あるのをもって知るべし。

風土記久慈郡の条に、薩都の里に古く国栖あり、名を土雲という。ここに兎上命、丘に登り、攻め滅ぼす時に「よく殺したる、福なるかも」というのに因み、佐都と名づく云々。

國誌に薩都は東鑑には佐都に作り、いまの佐都宮なりと見えたり。今佐都宮と称えるのはのちの転化なり。今猶佐都宮村在りこれ也。

○餘戸 あまりべ

和名鈔に久慈郡餘戸郷あり。行方郡の条に言えるがごとし。

○梁津 やなつ

和名鈔に那珂郡梁津郷あり。郡の中に今在る地を知らず。

○伴部 ともべ

和名鈔に那珂郡伴部郷あり。郡の中に今なお友部村在り、これなるべし。

＊…友部町

○高野 たかの

和名鈔に多珂郡高野郷あり。郡の中に今在る地を知らず。

○藻嶋 もしま

和名鈔に多珂郡藻嶋郷あり。郡の中に今在る地を知らず。

風土記多珂郡の条に、郡の南三十里、藻嶋驛家あり云々。昔倭武天皇、船に乗り海に浮かび、嶋磯をご覧になって、種々の海藻生い茂っていたので、斯く名づく云々。

日本後記に「弘仁三年（812）十月常陸國藻嶋云々六駅廢す云々」と有り。

○新井 にいい

和名鈔に多珂郡新井郷あり。郡の中に今在る地を知らず。

○賀美 がみ

和名鈔に多珂郡賀美郷あり。郡の中に今在る地を知らず。いま案ずるに郡の中に神岡村在り、これではないか。

○道口 みちくち

和名鈔に多珂郡道口郷あり。郡の中に今在る地を知らず。

風土記多珂郡の条に、久慈野の堺の助川をもつて、道の前と為す。郡を去ること西北に六十里、いまなお道前（みちくち）の里と言ひ、陸奥の石城郡苦麻村を道後（みちしり）と為す云々。

上巻終わり

【特別企画】

打田昇三の太平記（4）巻第二・3

○ 天下怪異（てんかけい）の事

日野俊基が斬られたのは元弘二年（一二三二）の夏であるが、其れより五年前の嘉暦二年（一二二七）春に、奈良では大乗院の禪師房に居た僧兵と興福寺系の僧兵が合戦を始めた。その頃は程度の低い無頼漢の様な僧兵が寺院に巢食って居て、寄ると触ると喧嘩をしていたらしい。

此の争乱により有名寺院の金堂、講堂、南圓堂、西金堂などが兵火に罹って焼失した。また元弘元年（一二三二）には比叡山延暦寺の東塔北谷から兵火が起こり、四王院、延命院、大講堂、法華堂、常行堂が灰になってしまった。善良な市民たちは天下の災難が襲い掛かる前兆ではないかと恐れたのである。そうした折に、同年の七月三日には大地震があつて紀伊の国では二十アール程の干潟が陸地になる様な地殻変動が起こり、七月七日には富士山が大きく崩れる地震も起きた。

気象庁が無いから宮中の占い師が亀の甲羅を焼いて占い「是は国王が位（くらい）を変え、大臣が災難に遭う」と判定した。それを其の儘で言う訳にはいかないので表現を変えて大臣から「深くお慎み有るべき」と、天皇に報告した。自然災害は天皇の所為では無いが、寺院の火災は坊主の怠慢、政府の監督責任になる。それにしても災害が頻発するのは只事では無い！どうなる事かと人々が案じていたところ、其の年の八月二十二日に鎌倉から監察官として二人の武士が三千余騎を率い上洛する……と噂が立ち、事情は分からないが京

都で何かが起こるのでは無いか？と近畿地方から軍勢が集まつて来たので大騒ぎになった。混乱に紛れて一旗挙げようと目論む連中である。

ところが鎌倉の使者が到着し、幕府の命令が入った文書箱が未だ開かれないうちから情報が漏れて「……今回の幕府使者は、天皇を何処か遠方に遷し大塔宮を死罪とするものである……」とする内容が僧兵たちに知られてしまった。僧兵たちは大塔宮と通じていたから後醍醐天皇にも報告が行く。八月二十四日の夜には大塔宮から連絡があつた。

「……急いで奈良へ脱出してください。此方で抵抗もしますが、未だ防備が完全では有りません。また、取り敢えず、天皇の近臣一人を天子の代理として比叡山に差し向け天皇臨幸のことを伝えて下さい。それにより敵は比叡山に向かいますが衆徒らは本山防御のために身命を賭して戦う筈です。」

もし合戦が長引いた場合は伊勢・伊賀・大和・河内などの官軍を以て都に進撃させれば凶徒（此の場合は幕府軍）を討つことが出来ます。国家の安危は此の一举にあると承知しております……」

元気の良い申し入れであるが、後醍醐天皇は野心家の割には理想ばかり高くして無為無策だったようである。何の返事もしなかった。それでも宿直勤務に就いていた尹（いん）監察職を兼ねた大納言の藤原師賢や萬里小路（まのこうじ）中納言ら数人の公家と呼び「……どうしようか？」と訊ねた。萬里小路藤原が「……逆心が主君を犯そうとする時は、暫く身を隠して国家を保つのは悪いことでは無く中国大陸の王朝にも前例があります。今は思案をする余裕はありません。夜も更けましたから早く脱出をして下さい！」と急かせてから、天皇の証拠品である三種の神器と共に天皇を車に乗せ、

ドア（簾）の隙間から女官用の衣装を垂らして陽明門から脱出させようとした。

時間も時間であるから警備の武士が怪しんで車を抑え「何方ですか？」と質問する。随行している藤原と弟の季房が「……是は中宮（後伏見天皇皇女）が北山殿へ行かれる御車である！」と制したので、警備の者も「どうぞ！」と言う他はない。

其の後で源中納言具行、按察（あぜち）監察職大納言藤原公敏、六条（源）少将忠顕などの公家たちが御所を脱出し六条河原で追い付いた。

其処からは天皇を普通の駕籠に移したけれども駕輿丁（がよちよう）専門職が居ないので天皇の供をしていた大膳大夫（だいぜんのだいふ）と言う高官とか宮中で雅楽を担当する者などがフラフラしながら担ぎ出した。その頃天皇は歩くことも満足に出来なかったらしい。お供をする公家も正式の衣装は脱ぎ棄てて官位の無い者のような服装になり、どこかの家臣が女性同伴で京都七大寺に参詣するようにして輿の周辺をうろついた。

一行が京都・奈良の県境に差し掛かる頃には夜も明けて、原文には「……此処にて朝餉（あさがれい）の供御を進めて……」とあるが、魚料理を出した訳では無い。その辺の農家に頼んで何か食べさせたのであろう。程なく奈良に着き、東南院という寺院に天皇を入れた。此の寺院の僧正は天皇に対する忠誠心の強い人物であったから、藤原藤房らは事情を打ち明けて僧や僧兵たちの反応を其れと無く聞いて貰ったのだが、有力者の西室顕実という僧が鎌倉北条氏の一族であつた為に、誰も天皇に味方してくれそうに無い。

そう言う状態では奈良に皇居を遷すことなど出来る相談では無いから、翌日には奈良から逃れて

京都府相楽郡和束の鷲峯山に入った。しかし此処は余りにも山深い場所であり(当時は)人里も離れているので、何かを計略するにも直ぐと言う訳にはいかない。何処か要害の地で…と言うので八月二十七日には、やっと集めた僅かな人数だが奈良の僧兵を連れて笠置の石室(いわや)へ移った。その際でも潜幸の儀式を実施したというから当時の天皇や公家は何を考えていたか分らない。

○師賢登山の事、附・唐崎浜合戦の事

「もろかたとうざんのこと…」とあるが趣味やスポーツの話では無い。幕府の追及を恐れて御所を脱出した後醍醐天皇の行き場が無いので、比叡山に匿って貰おうとして大納言の藤原師賢が僧兵軍団と交渉に行く話であり、其れを指示したのは大塔宮である。然し僧兵が味方に付く保証は無いから、先ずは師賢が天皇の衣装と駕籠を借りて先に進んだ。芝居がかった工夫の効き目があったのかどうか、夜逃げして来た天皇は比叡山の西塔院へ入れて貰う事ができたのである。

其処で西塔院の釈迦堂を仮の皇居とし「天皇が山門(比叡山の僧兵)を頼って来られた…」と全山一帯に披露したので、僧兵軍団はもとより近辺の大津、松本、戸津、比叡辻(へいつじ)、仰木、絹河、和仁、堅田などの住民までが我れ先にと集まって来た。其の人数が多かったので比叡山一帯が人で埋まったように見えた。

一方、幕府の出先機関である六波羅では其の様な事態が起きていることなど知らないから、夜が明けたならば鎌倉からの使者が出向いて天皇を強制連行しようと打ち合わせをしているところへ比叡山の淨林房阿闍理豪誉(じようりんぼうあじやりこうよ)と言う坊さんから使者が来て「既に昨

夜のうちに天皇が頼って来られ、三千の僧兵たちが従った。更に近江・越前の軍勢を待つて明日は六波羅へ攻め込む…という噂がある。大事にならぬうちに大至急、東坂本へ幕府軍勢を差し向けられたし…此の豪誉が後詰め(後方支援)して天皇を討ち取って見せよう…」と、現代でも余り大声では言えないようなセリフを申し述べた。

当然ながら両六波羅(幕府方)は驚いて確認の為に内裏(皇居)へ行ってみると、女官たちが猫でも探す様に泣きながら消えた天皇を探していたので天皇脱走は本当のことだと知った。そうなるに猶予は出来ないから「天皇に味方した」僧兵たちの勢力が拡大しないうちに山門(比叡山)を攻撃しよう」と京都の四十八か所に詰めていた武士団と周辺五か国から総動員した武士団と合計五千余騎を二手に分けて大手軍は赤山(せきざん)と呼ばれた小さい山の麓から南下させ搦め手(裏手)軍は現在の大津方面から攻めたいらしい。原本には搦め手軍の事が詳細に書かれているから大手軍は作戦上の囷(おとり)であったかも知れない。

搦め手には佐々木三郎判官時信、海東左近将監、長井丹後守宗衡、筑後前司貞知、波多上野前司宣道、常陸前司時朝らの武将に、美濃・尾張・丹波・但馬の軍勢を差し添えた七千余騎が大津・松本を経て唐崎の松辺りに押し掛けた。なお名目だけであらうけれども武将の名に「前司」と付いているのは諸国国司経験者である。

一方、攻められる側は大塔宮と頼られた妙法院門主とが比叡山で挙兵した形になったが、城砦設備では無く本来は仏教施設であるから難攻不落と言う訳にはいかない。それでも近辺の宗教関係者が三百、五百と武装して駆け付けたので一夜で六

千余騎の勢力になった。原本に「解脱同相の御衣を脱ぎ給ひて、堅甲利兵の御貌に替り、垂迹和光の砌、忽ちに變じて勇士守禦の場と成り…」と有るが、幾ら着替えても僧侶は僧侶、武士とは中身が違うから合戦では不利になる。

そのうちに攻め寄せる軍勢の主力は大津方面から琵琶湖に沿って北上し、既に戸津の宿近くまで進んできた。現在の名勝・近江八景「唐崎の松」付近であろうか。報告を受けた比叡山では子会社の圓宗院とか、中坊に居た勝行房など元氣な僧兵たちを派遣したのだが、兵力は三百ほどしか無く、然も全員が徒歩で騎馬武者が居ない。其の状態は敵にも分かるから加減はしてくれない。

寄せ手の海東左近が先ず「敵に援軍が来ないうちに潰せ!」とばかり、鎧の袖で顔面を防ぎながら三尺四寸の大太刀を振り回しつつ渦巻き状に布陣した僧兵軍の中心に騎馬で突入して来た。其の威勢で忽ち三人の僧兵が斬り倒されたけれども、海東についてくる味方が居ない。仕方が無いので湖岸の波打ち際で休憩していた。それを少し離れた場所で見えていた岡本房の播磨堅者快実と言う僧兵が前に並べた楯を踏み倒すようにして短か目の長刀(なぎなた)を水車の様に振り回しつつ海東に迫った。海東は此の一撃を左手で受けながら相手の兜を打ち割ろうと片手撃ちした。

兜を割るつもりで斬ったので力が入る。しかし狙いが外れて相手の袖部分が斬れた。斬ったほうは弾みで馬から落ちそうになる。其処を狙って快実が長刀で相手の頭部から顔面を数回斬ったので海東左近は馬から落ちた。時代劇では「武名高き〇〇を▽▽が討ち取った…」などと名乗りを上げる場面なのだが、此の場合は相手が誰だか知

らなかつたので快実は「武家の大将一人を討ち取つたり！」と叫んでから、合戦の初めに景氣良しと笑つて引き揚げかけた。

其処は琵琶湖岸の人家が点在する場所であるから合戦を見に来た者も多い。其の中から年齢十五、六歳程の少年が走り出て来て腰に差していた立派な小太刀を抜き、引き揚げる快実の後方から頭部を数回に亘り斬り付けた。しかし武芸未熟なので快実の兜が少し傷ついた程度である。快実は法師であるから子供を討つ迄も無いと、適当にあしらつていたのだが、離れた場所に居た仲間の法師が快実の危機と見て少年を弓で射てしまった。

少年は快実が討ち取つた海東左近の息子で幸若丸という。家に残して来たのだが密かに父の後を追つて戦場に現れ、討たれた父を見て同じ場所ですら死した。名は残したが哀れなことである。

このときに海東の家来が三十六騎居たのだが、肝心の時に間に合なかつた。それでも快実を討とうとして（主君の首を取り返そうとして）八方から攻め立てた。しかし場所が浜辺であるから慣れて居ないと馬も十分に動けない。快実は海東の首を一旦、敵に預けてから縦横無尽に戦つた。

その頃に、ようやく寄せ手の軍勢も主力が集まつて来たので佐々木三郎判官時信が後方から「味方を討たすな！続け！」と命令した。何処の武士かは記録されていないが伊庭、目賀多、木村、馬淵などの三百余騎が一斉に攻め掛かつたので快実も危うくなつた。それを救おうとして桂林房の悪讃岐、中房の小相模、勝行房の侍従堅者（りつしや）定快、金蓮房の伯耆（ほうき）直源の四名が左右から敵の中に斬り込んだが、讃岐と直源は直ぐに討たれてしまった。

其の間に後陣の僧兵五十余人が合戦に加わつて攻撃に出たのだが、唐崎の濱は東が琵琶湖で汀（なぎさ）水際が崩れており西に深田があつて馬も通れない。砂浜が広がるように見えても道は狭いため、敵陣の後方へ回することも敵を獲り込めることも出来ない。其の為に攻撃側も守備側も集めた兵力の一部しか戦えないのである。目立ちたがりが戦つて他の者は見物しているほかは無い。

其れでも唐崎で合戦が始まつたと言うので僧兵側に加勢する三千余騎が今路へ向かい、本院の衆徒七千余人も三宮林と言う場所から駆け下つた。さらに堅田、和仁など湖岸に住む信者たちは敵の後方を遮断するため大津を指して小舟三百余を湖面に浮かべ、デモストレーションを始めた。

此の場合、政府軍に当る六波羅勢も此の状態を見て「是は叶わぬ！」と思ひ比叡山南麓・志賀の里に在る閻魔（えんま）堂辺りから引き返した。しかし比叡山に住む宗徒たちは、合戦場が自分の家の庭と同じであるから此処彼処の難所に敵を追ひ詰めて矢を射かけたから現場を知らない武士たちは谷間などに馬を落としてしまい、呆然としている間に討たれた者が多く、海東某は家臣八騎が、波多野某は家臣十三騎が、真野入道は父子が、平井九郎は主従が、いずれも谷底で討死した。

搦め手攻撃の先頭を進んだ佐々木判官は、馬を射られたので乗り換え馬を発注して其れが到着するのを待っている間に大敵に囲まれてしまった。万事休すという時に、武士として名を惜しみ命を軽んじる家臣（本人では無く）数名が、敵と戦い討ち死にしている間に、萬死に一生を得て白昼堂々と都へ引き返して来た。それやこれやと久しく天下が穏やかで合戦の噂なども聞かれなかつた

のに、どうしたことが俄かに合戦が起こり人々は慌（あわ）て騒いで天地が動転するような時代になつたのである。（はつきり言わせて貰えば、後醍醐天皇が幕府転覆の野心を抱いたからであるが）

○持明院殿、六波羅に御幸の事

現在では「死語」に近いが、天皇制を「万世一系」などとして自慢していた時代があつた。別に天皇で無くても祖先から子孫へ伝わっていけば誰でも「万世一系」を引き摺っているのだが：

ところが其の象徴的な天皇制が、事もあるうに分裂して本家争いをした時代がある。俗に「南北朝時代」と呼ばれる十四世紀前期のことである。国民のことなど全く考えない其の不埒な連中は、自分たちでは收拾できない皇位継承のトラブルに幕府が介入したことに不満を持ち、反乱を起こそうとして日本を混乱に導くのである。

持明院殿とは、其の一派で後深草天皇―伏見天皇―後伏見天皇―花園天皇―光厳天皇―光明天皇：などから現在の皇統に続く系統であり、其れに対抗する系統として大覚寺統（後深草天皇の弟である亀山天皇から後醍醐天皇に至る）があつた。

本文に戻ると、世情が混乱して（責任は皇族にあるのだが）流言蜚語が飛び交ひ、野心の有る者が天皇を奪つて是を利用しようとする恐れもあるというので元弘元年（一二三三）八月二十七日には幕府の指示で北朝系の後伏見天皇と花園天皇を幕府機関に近い六波羅の北に移した。転居に従う顔ぶれは前右大臣・藤原兼季、三条大納言こと藤原通頭、西園寺大納言こと藤原公宗、日野前中納言こと藤原資名、防城参議経頭、日野参議資明らであり仰々しく正装した上に万に備え腹巻などを付けていた。穏やかであつた京都市内も徐々に

物騒になったものと、人々は驚くばかりである。

○主上臨幸、実事に有らざるに依って山門変議の事、附・紀信の事

比叡山の僧兵たちは前々章段の唐崎浜合戦などで後醍醐天皇の為に戦った。攻め寄せた幕府軍勢は手痛い敗北を喫したのである。天皇が比叡山に留まれば良いのだが幕府軍が勢力を増して攻めて来ると絶対的勝利の保証は無く、更に僧兵軍団も百％天皇側では無いから此処が安住の地にはならない。元弘元年（一三三一）八月二十七日には後醍醐天皇が密かに脱出し、既に比叡山に居ないのであるが僧兵たちには知らされていない。

天皇が居る以上は仮の皇居が必要であろうと、側近たちが西塔を指定したので延暦寺本院は面目を失った。寿永年間に後白河法皇が比叡山へ避難して来た時も、西塔から東塔へ移っていたので、今回も其の先例に依るらしいのだが本院としては立場が有るから本院移転を西塔側へ申し入れた。西塔側も是を了承して、天皇にそれを報告しようとしたところ偽物であることに気付いた。簾（すだれ）の向こうで顔が見え無い様にしていたのが丁度、強風で簾が巻き上がりバレてしまった。後醍醐天皇と一緒に夜逃げをして来た尹大納言が天皇の衣服を着て座っていたのである。幾ら天皇でも坊主を騙すのは良くない。

信用されて居なかったと気付いた僧兵たちは当然ながら興醒めし、以後は誰も天皇を護ろうとしなくなった。そうなるとう天皇でも夜逃げするしかない。こつそりと比叡山から離れて淀川支流（上流）に在る笠置の岩室（いわむろ）へ移転した。其の事も原因の一旦であろうが、かねてから幕府

に好意を持っていた比叡山の有力者である上林坊の阿闍梨豪誓が、残務整理で居残っていたと思われる大塔宮の執事・安居院中納言法印澄俊（あごいんちゅうなごんほういんちようしゅん）を捕えて六波羅（幕府）に突き出した。また出家していた大名の護正院僧都・猷全（ゆうぜん）は官方（天皇側）に付いて一の木戸を護っていたのだが状況不利を覚って仲間と共に六波羅側に降伏した。

是を始めとして官方に付いた僧兵たちも次々と逃亡するか降伏するかして、天皇に味方する為に留まる幹部は光林房の律師・源存、妙光院の小相模、中房の悪律師など三・四人になってしまった。山門の重役であった皇族の妙法院と大塔宮とは共に比叡山の八王子に留まっていたのだが、状況

の悪化が目に見えてきたので天皇の行方を案じて取り敢えず脱出を考えた。先ず、家臣に命じて篝火をやたらに焚かせ、未だ大勢が居るように見せ掛けてから従う衆徒三百人を連れて琵琶湖畔の戸津浜へ下り、小舟を集めて瀬田川を遡上し石山まで逃げた。妙法院は足が不自由だったので其の地に隠れ、大塔宮は更に奥地を目指して奈良方面に逃げて行つた。思えば高貴の身分で頭職を捨て、先の知れない漂泊の旅に出るのであるから心細く泣く泣く東西に別れた……と原文にあるが、身分が高かるうが、庶民であろうが別れは辛い。

そもそも今回の事（僧兵の離反）は後醍醐天皇が比叡山を頼りながら、さつさと自分だけ脱出したことが悲劇の原因であろう。原本には遠慮して天皇の深慮遠謀の様に書いてあるが、人騒がせで勝手な天皇の印象は免れない。

其の昔、中国大陆で強国の秦（しん）が滅び、楚の項羽と漢の高祖が国を争うこと八か年に及び

合戦を展開すること七十余度に及んだが常に項羽が勝ち高祖が苦しんだ。或る時に高祖が滎陽城（けいようじょう）に籠り、項羽は軍勢を以て是を幾重にも包囲した。当然、城中では食糧不足となり兵は餓えて戦うに力無く通れるに道が無かった。其の時に高祖の家臣で紀信と言う者が、王の前に進み出て次の様な意見を具申した。

「この様な苦況で兵を出せば（大敗して）漢は楚の属国となるでしょう。全員が無事に脱出する為には敵を欺（あざむ）いて城を出るしかありません。畏れ多いことですが私が漢王の名を騙って楚の陣営に降伏します。王を捕らえれば敵は包囲を解くでしょうから、其の間に城を出て兵力を回復し楚を滅ぼして下さい……」

その様にすれば紀信が無事で居られないことは明白なので高祖は迷ったが、国家の為に涙を飲んで紀信の献策に従った。紀信は王の衣を身に着け王の専用車に乗って城の東門から現れ降伏を宣言した。楚の軍勢は喜んで囲みを解き、東門に集まった。其の隙に高祖は三十余騎を従えて西門から脱出することが出来たのであるが、夜が明けて楚の軍勢が捕らえた漢王を見たところ、どう見ても本物では無いことが分かり、紀信は殺害されてしまった。脱出した高祖はやがて兵力を回復し宿敵を滅ぼして漢を建国したのである。

後醍醐天皇も尹大納言師賢の気転で比叡山を脱出することが出来たのであり、是を古代中国の出来事に劣らない忠義・知謀のように原本には書いてあるが規模が違ふし、後醍醐天皇は自分たちだけ密かに脱出したのであるから、偉そうなことは言える立場では無い様に思えてならない。（続く）

（巻第二終り）